

昭和文学全集



13

織田作之助

武田麟太郎

阿部知二

尾崎士郎

火野葦平

中山義秀

昭和文学全集



13

織田作之助

武田麟太郎

阿部知二

尾崎士郎

火野葦平

中山義秀

昭和文学全集

第13巻

昭和六三年十一月一日 初版第一刷発行

著者——上林暁、和田芳恵、野口富士男、川崎長太郎
八木義徳、木山捷平、檀一雄、外村繁

発行者——相賀徹夫

発行所——小学館

一〇一〇一 東京都千代田区一ツ橋二丁目二番一号
振替 東京八二〇〇番

電話 編集・〇三―三三〇―五二三六

業務・〇三―三三〇―五三三三

販売・〇三―三三〇―五七三九

印刷——大日本印刷株式会社

製本——大日本印刷株式会社

若林製本工場

用紙——三菱製紙株式会社

著者校印は省略いたしました

定価=4,000円

Printed in Japan ISBN4-09-568014-8

©IKUO TOKUHIRO SHIZUKO WADA

FUJIO NOGUCHI CHIYOKO KAWASAKI YOSHINORI YAGI

MISAO KIYAMA YOSOKO DAN AKIRA TONOMURA 1988

*造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら、おとりかえいたします。*本書の内容の一部または全部を、無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版者の権利の侵害となりますので、その場合はあらかじめ小社まで許諾を求めてください。

目次

織田作之助 5

7 夫婦善哉

2 7 放浪

4 3 勸善懲惡

6 4 木の都

7 0 猿飛佐助

9 3 六白金星

1 0 6 世相

1 2 8 競馬

1 3 6 二流文楽論

1 4 3 可能性の文学

武田麟太郎 155

1 5 7 浅草・余りに浅草的な

1 6 4 日本三文オペラ

1 7 6 釜ヶ崎

1 8 9 市井事

2 0 1 一の酉

2 1 1 銀座八丁

2 5 7 井原西鶴

2 7 8 大凶の籤

2 8 8 好きな場所

2 9 4 弥生さん

阿部知二 307

309 主知的文学論

314 日独対抗競技

321 冬の宿

404 黒い影

450 人工庭園

484 アルト・ハイデルベルヒ

尾崎士郎 491

493 人生劇場 青春編

火野葦平 657

659 麦と兵隊―徐州会戦従軍記

720 青春と泥濘

中山義秀 833

835 栄耀

848 厚物咲

865 碑

888 華燭

903 テニヤンの末日

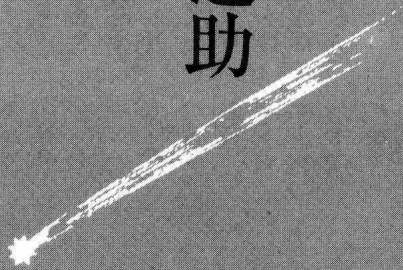
929 宋蓮花

952 咲庵

1021	作家アルバム
1029	織田作之助……石崎等
1034	武田麟太郎……山田有策
1038	阿部知二……小田切秀雄
1043	尾崎士郎……中島国彦
1047	火野葦平……東郷克美
1051	中山義秀……松本道介
	解説

	年譜
1055	織田作之助……矢島道弘
1059	武田麟太郎……武田文章
1063	阿部知二……福田久賀男
1067	尾崎士郎……尾崎俵士
1071	火野葦平……紅野敏郎
1075	中山義秀……栗坪和子
1080	底本について
1081	用字用語について

織田作之助



夫婦善哉

年中借金取が出はいりした。節季はむろんまるで毎日のことで、醬油屋、油屋、八百屋、鰯屋、乾物屋、炭屋、米屋、家主その他、いづれも厳しい催促だった。路地の入口で牛蒡、蓮根、芋、三ツ葉、蒟蒻、紅生姜、鰯など一銭天婦羅を揚げて商っている種吉は借金取の姿が見えると、下向いてにわかに鰻飩粉をこねる真似した。近所の子供たちも、「おっさん、はよ牛蒡揚げてんかいナ」と待て暫しがなく、「よっしゃ、今揚げたアるぜ」というものの挿鉢の底をごしごしやるだけで、水漬の落ちたのも気付かなかった。種吉では話にならぬから素通りして路地の奥へ行き種吉の女房に掛け合くと、女房のお辰は種吉とは大分違つて、借金取の動作に注意の目をくばった。催促の身振りが余つて腰掛けてゐる板の間を一寸でもたたくと、お辰

はすかさず、「人さまの家の板の間たたいて、あんた、それで宜ろしおまんのんか」と血相かえるのだった。「そこは家の神様が宿つたはるとこだつせ」

芝居の積りだがそれでも矢張り興奮するか、声に涙がまじる位であるから、相手は驚いて「無茶いいなはんナ、何も私はたたかしまへんぜ」とむしろ開き直り、二三度押問答の挙句、結局お辰はいい負けて、素手では帰せぬ破目となり、五十銭か一円だけ身を切られる想いで渡さねばならなかった。それでも、一度だけだが、板の間のことをその場で指摘されると、何とも言い訳のない困り方でいきなり平身低頭して詫言を入れ、ほうほうの態で逃げ帰つた借金取があつたと、きまつてあとでお辰の愚痴の相手は娘の蝶子であつた。

そんな母親を蝶子は見つともないとも哀れとも思つた。それで、母親を欺して買食いの金をせしめたり、天婦羅の売上箱から小銭を盗んだりして来たことが、ちよつと後悔された。種吉の天婦羅は味で売つてなかなか評判よかつたが、そのため損をしているようだった。蓮根でも蒟蒻でも頗る厚身で、お辰の目にも引き合はぬと見えたが、種吉は算盤おいてみて、「七厘の元を一銭に商つて損するわけはない」家に金の帰らぬのは前々の借金で毎日の売上げが喰込んで行くためだとの種吉の言いは尤もだったが、しかし、十二歳の蝶子には、父親の算盤には炭代や醬油代がはいっていないと知れた。

天婦羅だけでは立ち行かぬから、近所に葬式があるたびに、駕籠かき人足に雇われた。氏神の夏祭には、水干を着てお宮の大提灯を担いで練ると、日当九十銭になった。鎧を着ると三十銭あがりだった。種吉の留守にはお辰が天婦羅を揚げた。お辰は存分に材料を節約したから、祭の日通り掛りに見て、種吉は肩身の狭い想いをし、鎧の下を汗が走つた。よくよく貧乏したので、蝶子が小学校を卒えると、あわてて女中奉公に出した。俗に、河童横丁の材木屋の主人から随分と良い条件で話があつたので、お辰の顔に思いがけぬ血色が出たが、ゆくゆくは妾にしろとの肚が読

めて父親はうんと言わず、日本橋三丁目の古着屋へばかに悪い条件で女中奉公させた。河童横丁は昔河童が棲んでいたといわれ、忌わられて二束三文だったその土地を材木屋の先代が買い取って、借家を建て、今はきびしく高い家賃も取るから金が出来て、河童は材木屋だと陰口きかれていたが、妾が何人もいて若い生血を吸うからという意味もあるらしいかった。蝶子はむくむく女めいて、顔立も小ぢんまり整い、材木屋はさすがに煙眼だった。

日本橋の古着屋で半年余り辛抱が続いた。冬の朝、黒門市場への買出しに廻り道して古着屋の前を通り掛った種吉は、店先を掃除している蝶子の手があかぎれて血がにじんでいるのを見て、そのままはいつて掛け合い、連れ戻した。そして所望されるままに曾根崎新地のお茶屋へおちよぼ（芸者の下地ッ子）にやった。

種吉の手に五十円の金はいり、之は借金払いでみるみる消えたが、あとにも先にも纏まって受けとったのはそれ切りだった。もとより左団扇の気持はなかつたから、十七のとき蝶子が芸者になると聞いて、この父はとにかくに狼狽した。お披露目をするといつてもまさか天婦羅を配って歩くわけには行かず、祝儀、衣裳、心付けなど大変な物入りで、のみにて抱主が出してくれるのはいいが、それ

は前借になるから、いわば蝶子を縛る勘定になると、反対した。が、結局持前の陽気好きの気性が環境に染まつて是非に芸者になりたいたと蝶子に駄々をこねられると、負けて、種吉は随分苦面した。だから、辛い勤めも皆親のためという俗句は蝶子に当て嵌められぬ。不粹な客から、芸者になったのはよくよくの訳があつてのことやろ、全体お前の父親は……と訊かれると、父親は博突打ちでとか、欺されて田畑をとられたためだとか、哀れつぱく持ちかけるなど、まさか土地柄、気性柄蝶子には出来なかつたが、といつて、私を芸者にしてくれんようなそんな薄情な親であるもんかと泣きこんで、あわや勘当さわざだつたとはさすがに本当のこととも言えなんだ。「私のお父つあんは旦那さんみたいに良え男前や」と外らしたりして悪趣味極まつたが、それが愛嬌になった。——蝶子は声自慢で、どんなお座敷でも思い切り声を張り上げて咽喉や額に筋を立て、襖紙がふるえるという浅ましい唄い方をし、陽気な座敷には無くてかなわぬ妓であつたから、はっさい（お転婆）で売つていたのだ。——それでも、たった一人、馴染みの安化粧品問屋の息子には何もかも本当のことを言つた。

維康柳吉といい、女房もあり、こし四つの子供もある三十一歳の男だったが、逢い初

めて三月でもうそんな仲になり、評判立って、一本になつた時の旦那をしくじつた。中風で寝ている父親に代つて柳吉が切り廻している商売というのが、理髪店向きの石鹼、クリム、チック、ポマード、美顔水、ふけとりなどの卸問屋であると聞いて、散髪屋へ顔を剃りに行つても、其店で使っている化粧品のマークに氣をつけるようになった。ある日、梅田新道にある柳吉の店の前を通り掛ると、厚手を着た柳吉が丁稚相手に地方送りの荷造りを監督していた。耳に挟んだ筆をとると、さらさらと帖面の上を走らせ、やがて、それを口にくわえて算盤を弾くその姿がいかに甲斐甲斐しく見えた。ふと視線が合うと、蝶子は耳の附根まで真根になつたが、柳吉は素知らぬ顔で、ちよいちよい横眼を使うだけであつた。それが律儀者めいた。柳吉は些か吃りで、物をいうとき上を向いて一寸口をもぐもぐさせる、その恰好がかねがね蝶子には思慮あり氣に見えていた。

蝶子は柳吉をしつかりした頼もしい男だと思ひ、そのように言い触らしたが、そのため、その仲は彼女の方からのぼせて行つたと言われてもかえす言葉はない筈だと、人々は取沙汰した。酔い癖の淨瑠璃のサワリで泣声をうなる、そのときの柳吉の顔を、人々は正當に判断づけていたのだ。夜店の二銭のドテ

焼（豚の皮身を味噌で煮つめたもの）が好きで、ドテ焼さんと渾名がついていたくらいだ。

柳吉はうまい物に掛けると眼がなくて、「うまいもん屋」へ屢々蝶子を連れて行った。彼に言わせると、北にはうまいもんを食わせる店がなく、うまいもんは何といつても南に限るそうで、それも一流の店は駄目や、汚いことを言うようだが金を捨てるだけの話、本真にうまいもん食いたかったら、「一ぺん俺の後へ随いて……」行くと、無論一流の店へははいらず、よくて高津の湯豆腐屋、下は夜店のドテ焼、粕饅頭から、戎橋筋そごう横「しる市」のどじょう汁と皮鯨汁、道頓堀相合橋東詰「出雲屋」のまむし、日本橋「たこ梅」のたこ、法善寺境内「正弁丹吾亭」の関東煮、千日前常盤座横「寿司捨」の鉄火巻と鯛の皮の酢味噌、その向い「だるまや」のかやく飯と粕じるなどで、何れも銭のかからぬいわば下手もの料理ばかりであった。芸者を連れて行くべき店の構えでもなかったから、はじめは蝶子も折りによってこんな所へと思つたが、「ど、ど、ど、どや、うまいやろが、こ、こ、こ、こんなうまいもん何処に行つたかて食べられへんぜ」という講釈を聞きながら食うと、なるほどうまかつた。

乱暴に白い足袋を踏みつけられて、キャッ

と声を立てる、それもかえつて食欲が出るほどで、そんな下手もの料理の食べ歩きがちょっとした愉しみになった。立て込んだ客の隙間へ腰を割り込んで行くのも、北新地の売れっ子の沽券に關わるほどではなかった。第一、そんな安物ばかり食わせどおししているもの、帯、着物、長襦袢から帯しめ、腰下げ、草履までかなり散財してくれていたから、けちくさいと言えた義理ではなかった。クリーム、ふけとりなどはどうかと思つたが、之もこつそり愛用した。それに、父親は今なお一錢天婦羅で苦勞しているのだ。殿様のおしのびめいたり、しんみり父親の油滲んだ手を思い出したりして、後に随いて廻っているうちに、だんだん情緒が出た。

新世界に二軒、千日前に一軒、道頓堀に中座の向いと、相合橋東詰にそれぞれ一軒ずつある都合五軒の出雲屋の中でまむしのうまいのは相合橋東詰の奴や、御飯にたつぷりしみこませただしの味が「なんしょ、酒しよが良う利いとる」のをフーフー口とがらせて食べ、仲良く腹がふくれてから、法善寺の「花月」へ春団治の落語を聴きに行くと、ゲラゲラ笑い合つて、握り合つて手が汗をかいいたりした。

深くなり、柳吉の通い方は段々頻繁になつた。遠出もあつたりして、やがて柳吉は金に

困つて来たと、蝶子にも分つた。

父親が中風で寝付くとき忘れずに、銀行の通帳と実印を蒲団の下に隠したので、柳吉も手のつけようがなかった。所詮、自由になる金は知れたもので、得意先の理髪店を駆け廻つての集金だけで細かくやりくりしていたから、みるみる不義理が蓄んで、蒼くなつていた。そんな柳吉のところへ蝶子から男履きの草履を贈つて来た。添えた手紙には、大分永いこと来て下さらぬゆえ、しん配しています。一同舌をしいゆえ……とあつた。一度話をしたい（一同舌をしい）と柳吉だけが判読出来るその手紙が、いつの間にか病人のところへ洩れてしまつて、枕元へ呼び寄せての度重なる意見もかねがね効目なしと諦めていた父親も、今度ばかりは、打つ、撲るの体の自由が利かぬのが残念だと涙すら浮べて腹を立てた。わざと五つの子を膝の上に抱き寄せて、若い妻は上向いていた。実家へ帰る肚を決めていた事で、僅かに叫び出すのをこらえているようだった。うなだれて柳吉は、蝶子の出しゃ張り奴と肚の中で呟いたが、しかし、蝶子の気持は悪くとれなかつた。草履は相当無理をしらしく、戎橋「天狗」の印がはいっており、鼻緒は蛇の皮であつた。

「釜の下の灰まで自分のもんや思たら大間違

いやぞ、久離切つての勘当……」を申し渡した父親の頑固は死んだ母親もかねがね泣かされて来たくらいゆえ、一旦は家を出なければ収まりがつかなかった。家を出た途端に、ふと東京で集金すべき金がまだ残っていることを思い出した。ざっと勘定して四五百円はあると知って、急に心の曇りが晴れた。直ぐ行きつけの茶屋へあがつて、蝶子を呼び、物は相談やが駈落ちせえへんか。

あくる日、柳吉が梅田の駅で待っていると、蝶子はカンカン日の当たっている駅前広場を大股で横切つて来た。髪をめがねに結っていたので、変に生々しい感じがして、柳吉はふいといやな気がした。直ぐ東京行きの汽車に乗った。

八月の末で馬鹿に蒸し暑い東京の町を駆けずり廻り、月末にはまだ二三日間があるというのを拝み倒して三百円ほど集めたその足で、熱海へ行つた。温泉芸者を揚げようというのを蝶子はたしなめて、これからの二人の行末のこと考えたら、そんな呑気な氣イでいてられへんと尤もだったが、勘当といつても直ぐ詫びをいれて帰り込む^{ちか}柳吉は、かめへん、かめへん。無断で抱主のところを飛出して来たことを気にしている蝶子の肚の中など、無視しているようだった。芸者が来るど、蝶子はしかし、ありつたけの芸を出し切

つて一座を凌^{まさ}い、土地の芸者から「大阪の芸者衆にはかなわんわ」と言われて、僅かに心が慰まった。

二日そうして経ち、午頃^{ひるごろ}、ごおーと妙な音がして来た途端に、激しく揺れ出した。「地震や」「地震や」同時に声が出て、蝶子は襖に撞^つまったことは撞^つまったが、いきなり腰を抜かし、キャツと叫んで坐り込んでしまった。柳吉は反対側の壁にしがみついたまま離れず、口も利けなかった。お互いの心にその時、えらい駈落ちをしてしまったという悔が一瞬あった。

避難列車の中では碌々物も言わなかった。やっと梅田の駅に着くと、真直ぐ上塩町の種吉の家へ行つた。途々、電信柱に関東大震災の号外が生々しく貼^はられていた。

西日の当るところで天婦羅を揚げていた種吉は二人の姿を見ると、吃驚^{びっくり}して暫くは口も利けなんだ。日に焼けたその顔に、汗とはつきり区別のつく涙が落ちた。立ち話でだんだんに訊けば、蝶子の失踪は直ぐに抱主から知らせがあり、どこにどうしていることや、悪い男にそのかさされて売り飛ばされたのと違うやろか、生きとつてくれているんやろかと心配で夜も眠れなんだという。悪い男云々を聴き咎^{とが}めて蝶子は、何はともあれ、扇子をバ

チパチさせて突つ立っている柳吉を「この人私の何や」と紹介した。「へい、おこしやす」種吉はそれ以上挨拶が続かず、そわそわして碌々顔もよう見なかった。

お辰は娘の顔を見た途端に、浴衣の袖を顔にあてた。泣き止んで、はじめて両手をついて、「このたびは娘がいろいろと……」柳吉に挨拶し、「弟の信一は尋常四年で学校へ上つとりますが……今日は、未だ退けて来とりまへんので」などと言うた。挨拶の仕様がなかったたので、柳吉は天候のことなど吃り勝ちに言うた。種吉は水を註文^{いん}に行つた。

銀蠅^{ぎんばえ}の飛びまわる四畳の部屋は風も通らず、ジーンと音がするように蒸し暑かった。種吉が氷いちごを提箱に入れて持ち帰り、皆は黙々とそれをすすつた。やがて、東京へ行って来た旨蝶子が言うのと、種吉は「そら大変や、東京は大地震や」吃驚してしまつたので、それで話の糸口はついた。避難列車で命からがら逃げて来た^きと聞いて、両親は、えらい苦労したなとしきりに同情した。それで、若い二人、とりわけ柳吉はほつとした。「何とお詫びして良えやら」すらすら彼は言葉が出て、種吉とお辰は頗る恐縮した。

母親の浴衣を借りて着替えると、蝶子の肚はきまつた。一旦逐電したからにはおめおめ抱主のところへ帰れまい、同じく家へ足踏み

出来ぬ柳吉と一緒に苦勞する、「もう芸者を止めまっさ」との言葉に、種吉は「お前の好きなようにしたらええがな」子に甘いところを見せた。蝶子の前借は三百円足らずで、種吉はもはや月賦で払う肚を決めていた。「私が親爺に無心して払いまっさ」と柳吉も黙って居るわけに行かなかったが、種吉は「そんなことして貰たら困りまんがな」と手を振った。「あんさんのお父つあんに都合が悪うて、私は顔合わせししまへんがな」柳吉は別に異を樹てなかった。お辰は柳吉の方を向いて、蝶子は麻疹^{はしか}の他には風邪一つひかしたことはない、また身体どこ探してもかすり傷一つない筈、それまでに育てる苦勞は……言い出して泪^{なみだ}の一つも出る始末に、柳吉は耳の痛い気がした。

二三日、狭苦しい種吉の家でごろごろしていたが、やがて、黒門市場の中の路地裏に二階借りして、遠慮気兼ねのない世帯を張った。階下^{した}は弁当や寿司につかう折箱の職人で、二階の六畳はもっぱら折箱の置場にしてあったのを、月七円の前払いで借りたのだ。たちまち、暮しに困った。

柳吉に働がないから、自然蝶子が嫁ぐ順序で、さて二度の勤めに出る気もないとすれば、結局嫁ぐ道はヤトナ芸者と相場が決つて

いた。もと北の新地にやはり芸者をしていたおきんという年増^{としあがり}芸者が、今は高津に一軒構えてヤトナの周旋屋^{しゆせんや}みたいなことをしていた。ヤトナというのはいわば臨時雇で宴会や婚礼に出張する有芸仲居^{うげなかり}のことで、芸者の花代よりは随分安上りだから、けちくさい宴会からの需要が多く、おきんは芸者上りのヤトナ数人と連絡をとり、派出させて仲介の分をはねると相当な儲け^{もち}になり、今では電話の一本も引いていた。一宴会、夕方から夜更けまで六円、うち分をひいてヤトナの儲けは三円五十銭だが、婚礼の時は式役代も取るから儲けは六円、祝儀もまぜると悪い収入りではないとおきんから聴いて、早速仲間にはいった。

三味線をいれた小型のトランク提げて電車で指定の場所へ行くと、直ぐ膳部の運びから燗^{かん}の世話に掛る。三、四十人の客にヤトナ三人で一通り酌をして廻るだけでも大変なのに、あとがえらかった。おきまりの会費で存分^{じゆうぶん}愉しむ肚の不粋な客を相手に、息のつく間もないほど弾かされ歌わされ、浪花節^{ななげふ}の三味から声色の合の手まで勤めてくれたたになっているところを、安来節を踊らされた。それでも根が陽気好きだけに大して苦にもならず身をいれて勤めていると、客が、芸者よりましや、やはり悲しかった。本当の年を聞けば

吃驚するほどの大年増の朋輩^{ともだち}が、おひらきの前に急に祝儀を当てこんで若い女めいた身振りをするのも、同じヤトナであつてみれば、ひとつではなかった。夜更けて赤電車で帰った。日本橋一丁目で降りて、野良犬や拾い屋^{しやうい}（バタ屋）が芥^{かひ}箱をあさっているほかに人通りもなく、静まりかえつた中にただ魚の生臭い臭気が漂うている黒門市場の中を通り、路地へはいるとブンブン良い香^{にお}いがした。

山椒昆布を煮る香いで、思い切り上等の昆布を五分四角ぐらいの大きさに細切りして山椒の実と一緒に鍋にいれ、亀甲万の濃口醬油^{じやうこう}をふんだんに使つて、松炭のとう火でとろとろ二屋夜煮^{ふたや}めると、戎橋の「おぐらや」で売っている山椒昆布と同じ位のうまさになると柳吉は言い、退屈しのぎに昨日からそれにと掛り出していたのだ。火種を切らさぬことと、時々かきまわしてやるのが大切で、そのため今日は一歩も外へ出ず、だからいつもはきまつて使うはずの日に一円の小遣いに少しも手をつけていなかった。蝶子の姿を見ると柳吉は「どや、良え按配^{あんばい}に煮えて来よつたやろ」長い竹箸^{たけしほ}で鍋の中を掻き廻しながら言うた。そんな柳吉に蝶子はひそかにそこはかとなき恋しさを感じるのが、癖で甘つたる気分は外に出せず、着物の裾をひらいた長襦袢^{じゆばん}の膝でべたりと坐るなり「なんや、まだ

たいてゐるのか、えらい暇かかって何してるのや」「こんな口を利いた。

柳吉は二十歳の蝶子のことを「おばはん」と呼ぶようになった。「おばはん小遣い足らんぜ」そして三円ぐらい手に握ると、昼間は将棋などして時間をつぶし、夜は二ツ井戸の「お兄ちゃん」という安カフェへ出掛けて、女給の手にさわり、「僕と共鳴せえへんか」そんな調子だったから、お辰はあれでは蝶子が可哀想やと種吉に言い言いたが、種吉は「坊ん坊んやから当り前のこつちゃ」別に柳吉を非難もしなかった、どころか、「女房や子供捨てて二階すまいせんならん言うのも、言や言うもんの、蝶子が悪いさかいや」とかえて同情した。そんな父親を蝶子は柳吉のために嬉しく、苦勞の仕甲斐あると思った。「私のお父つあん、良えところあるやろ」と思ってくれたのか呉れないのか、「うん」と柳吉は氣のない返事で、何を考へているのか分らぬ顔をしていた。

その年も暮に近づいた。押しつまって何となく慌しい氣持のする或る日、正月の紋附などを取りに行くと言って、柳吉は梅田新道の家へ出掛けて行った。蝶子は水を浴びた氣持がしたが、行くなという言葉が何故か口に出なかった。その夜、宴会の口が掛つて来たので、いつものように三味線をいれたトランク

を提げて出掛けしたが、心は重かった。柳吉が親の家へ紋附を取りに行ったというただそれだけの事として軽々しく考へられなかった。そこには妻も居れば子もいるのだ。三味線の

音色は冴えなかった。それでも、やはり襖紙がふるえる程の聲で歌い、やつとおひらきになつて、雪の道を飛んで帰ってみると、柳吉は戻っていた。火鉢の前に中腰になり、酒で染まった顔をその中に突つ込むようにしよんぼり坐っているその容子が、いかにも元氣がないと、一目でわかった。蝶子はほつとした。——父親は柳吉の姿を見るなり、寢床の中で、何しに來たと嘔鳴りつけたそうである。妻は籍を抜いて実家に帰り、女の子は柳吉の妹の筆子が十八の年で母親代りに面倒見ているが、その子供にも會わせて貰えなかった。柳吉が蝶子と世帯を持ったと聽いて、父親は怒るというよりも柳吉を嘲笑し、また、蝶子のことに就てかなりひどい事を言つたということだった。——蝶子は「私のこと悪う言やはんのは無理おまへん」としんみりした。が、肚の中では、私の力で柳吉を一人前にしてみせまうさかい、心配しなはんなどひそかに柳吉の父親に向つて眩く氣持を持った。自身にも言い聽かせて「私は何も前の奥さんの後釜に坐るつもりやあらへん、維康を一人前の男に出世させたら本望や」そう思う

ことは涙をそその快感だった。その氣持の張りと柳吉が帰つて來た喜びとで、その夜興奮して眠れず、眼をピカピカ光らせて低い天井を睨んでいた。

まあまあから、蝶子はチラシを綴じて家計簿を作り、ほおれん草三錢、風呂錢三錢、ちり紙四錢、などと毎日の入費を書き込んで世帯を切り詰め、柳吉の毎日の小遣い以外に無駄な費用は慎んで、ヤトナの儲けの半分ぐらゐは貯金していたが、そのことがあつてから、貯金に対する氣の配り方も違つて來た。一錢二錢の金も使い惜しみ、半襟も垢じみした。正月を当てこんでうんと材料を仕入れるのだとて、種吉が仕入れの金を無心に來ると、「私には金みたいなものあらへん」種吉と入れ代つてお辰が「維康さんにカフェーというところイ行かす金あつてもか」と言い來たが、うんと言わなかった。

年が明け、松の内も過ぎた。はつきり勘当だと分つてから、柳吉のしよげ方は頗る哀れなものだった。父性愛ということもあつた。蝶子に言われても、子供を無理に引き取る氣の出なかつたのは、何れ婦參がかなうかも知れぬという下心があるためだったが、それでも、子供と離れていることはさすがに淋しいと、これは人ごとでなかつた。ある日、昔の遊び友達に會い、誘われると、もともと好き

な道だったから、久し振りにぐたぐたに酔うた。その夜はさすがに家をあげなかったが、翌日、蝶子が隠していた貯金帳をすっかりおろして、昨夜の返礼だとして友達を呼び出し、難波新地へはまりこんで、二日、使い果して魂の抜けた男のようにとぼとぼ黒門市場の路地裏長屋へ帰って来た。「帰るとこ、よう忘れんかったこっちゃな」そう言つて蝶子は頸筋を掴んで突き倒し、肩をたたく時の要領で、頭をこつこつたたいた。「おばはん、何すんねん。無茶しな」しかし、抵抗する元氣もないかのようだった。二日酔いで頭があげれとると、蒲団にくるまつてうんうん唸つてゐる柳吉の顔をビシヤリと撲つて、何となく外へ出た。千日前の愛進館で京山小田の浪花節を聴いたが、一人では面白いとも思えず、出ると、この二三日飯も咽喉へ通らなかつたこととて急に空腹を感じ、楽天地横の自由軒で玉子入りのライスカレーを食べた。「自由軒のラ、ラ、ライスカレーは御飯にあんじょうま、ま、ま、まむしてあるよつて、うまい」と嘗て柳吉が言つた言葉を想い出しながら、カレーのあとのコーヒーを飲んでゐると、いきなり甘い氣持が胸に湧いた。こっそり帰ってみると、柳吉はいびきをかいてゐた。だし抜けに、荒々しく揺すぶつて、柳吉が眼の眼をあけると、「阿呆んだら」そして

唇をとがらして柳吉の顔へもつて行つた。

あくる日、二人で改めて自由軒へ行き、帰りに高津のおきんの所へ仲の良い夫婦の顔を出した。ことを知つていたおきんは、柳吉に意見めいた口を利いた。おきんの亭主は嘗て北浜で羽振りが良くおきんを落籍して死んだ女房の後釜に据えた途端に没落したが、おきんは現在のヤトナ周旋屋、亭主は恥をしのんで北浜の取引所へ書記に雇われて、いわば夫婦共稼ぎで、亭主の没落はおきんのせいだなどと人に後指させぬ今の暮しだと、引合いに出したりした。「維康さん、あんたもぶらぶら遊んでばかりしてんと、何ぞ働く所を……」探す肚があるのかないのか、柳吉は何の表情もなく聴いていた。維康さんの肚は分らんとおきんはあとで蝶子に言うたので、蝶子は肩身の狭い思いがした。が、間もなく働き口を見つけたので、蝶子は早速おきんに報告した。それで肩身が広くなったというほどではなかつたが、やはり嬉しかった。

千日前「いろは牛肉店」の隣にある剃刀屋の通い店員で、朝十時から夜十一時までの勤務、弁当自弁の月給二十五円だが、それでも文句なかつたらと友達が紹介してくれたのだ。柳吉はいやとは言えなかつた。安全剃刀、レザー、ナイフ、ジャッキその他理髪に

関係ある品物を商っているのだから、やはり理髪店相手の化粧品を商つていた柳吉には、いちばん適しているだろうと骨折つてくれた、その手前もあった。門口の狭い割に馬鹿に奥行のある細長い店だから昼間なぞ日が充分射さず、昼電を節約した薄暗いところで火鉢の灰をつつきながら、戸外の人通りを眺めていると、そこの明るさが嘘のようだった。

丁度向い側が共同便所でその臭気がたまらなかつた。その隣りは竹林寺で、門の前の向つて右側では鉄冷鉱泉を売っており、左側、つまり共同便所に近い方では餅を焼いて売つてゐた。醬油をたつぷりつけて狐色にこんがり焼けてふくれているところなぞ、いかにもうまさうだつたが、買ふ氣は起らなかつた。餅屋の主婦が共同便所から出ても手洗水を使わぬと覺しがつたからや、と柳吉は帰つて言うた。また曰く、仕事は楽で、安全剃刀の広告人形がしきりに身体を動かして剃刀をといでゐる恰好が面白いとて飾窓に吸いつけられる客があると、出て行つて、おいでやす。それだけの芸でこと足りた。蝶子は、「そら、よろしおまんな」そう励ました。

剃刀屋で三月ほど辛抱したが、やがて、主人と喧嘩して頼みからとて店を休み休み出したが、蝶子はその口実を本真だと思ひ、朝おこしたりしなくなり、ずるずるべつたり店

をやめてしまった。蝶子は一層ヤトナ稼業に身を入れた。彼女だけには特別の祝儀を張り込まねばならぬと宴会の幹事が思うくらいであった。祝儀はしかし、朋輩と山分けだから、随分と引き合わぬ勘定だが、それだけに朋輩の気受けはよかった。蝶子はなん蝶子はんと奉られるので良い気になって、朋輩へ二円、三円と小銭を貸したが、渡すなり後悔して、さすがにはつきり催促出来なかったから、何かとべんちゃら（お世辞）して、はよ返してくれという想いをそれとなく見せるのだった。五十銭の金にもちくちく胸の痛む気がしたが、柳吉にだけは、小遣いをせびられると気前よく渡した。柳吉は毎日が如何にも面白くないようで、殊にこっそり梅田新道へ出掛けたい日は帰ってからのふさぎ方が目立ったので、蝶子は何かと氣を使った。父の勘気がとけぬことが憂鬱の原因らしく、そのことにひそかに安堵するよりも氣持の負担の方が大きかった。それで、柳吉がしばしばカフェへ行くと知っても、なるべく焼餅を焼かぬように心掛けた。黙って金を渡すときの氣持は、人が思っているほどには平気ではなかった。

実家に帰っているという柳吉の妻が、肺で死んだという噂を聴くと、蝶子はこっそり法善寺の「縁結び」に詣って蠟燭など思い切っ

た寄進をした。その代り、寢覚めの悪い氣持がしたので、戒名を聞いたたりして棚に祭った。先妻の位牌が頭の上にあるのを見て、柳吉は何となく変な氣がしたが、出しゃ張るなとも言わなかった。言えは何かと話がつれて面倒だとさすがに利口な柳吉は、位牌さえ蝶子の前では拝まなかった。蝶子は毎朝花をかえたりして、一分の隙もなく振舞った。

二年経つと、貯金が三百円を少し超えた。蝶子は芸者時代のことを思い出し、あれはもう全部払うてくれたんかと種吉に訊くと、「さいな、もう安心しーや、この通りや」と証文出して来て見せた。母親のお辰はセルロイド人形の内職をし、弟の信一は夕刊売りをしていたことは蝶子も知っていたが、それにしてもどうして苦面して払ったのかと、臉が熱くなった。それで、はじめて弟に五十銭、お辰に三円、種吉に五円、それぞれ呉れてやる氣が出た。そこで貯金は丁度三百円になった。その内、柳吉が芸者遊びに百円ほど使ったので、二百円に減った。蝶子は泣けもしなかった。夕方電灯もつけぬ暗い六畳の間の真中にべたりと坐り込み、腕ぐみして肩で息をしながら、障子紙の破れたところをじっと睨んでいた。柳吉は三味線の撥で撲られた跡を押えようとせず、ごろごろしていた。もう是以上節約の仕様もなかったが、それ

でも早くその百円を取り戻さねばならぬと、いろいろに工夫した。商売道具の衣裳も、余程せば詰れば染替えをするくらいで、あとは季節季節の変わり目ごとに質屋での出し入れで何とかやりくりし、呉服屋に物言うのものはかる程であつたお蔭で、半年経たぬ内にやつと元の額になったのを機会に、いつまでも二階借りしては人に侮られる、一軒借りて焼芋屋でも何でも良いから商売しようと思つそく柳吉に持ちかけると、「そうやな」氣の無い返事だったが、しかし、あくる日から彼は黙々として立ちまわり、高津神社坂下に間口一間、奥行三間半の小さな商売家を借り受け、大工を二日雇い、自分も手伝ってしかるべく改造し、もと勤めていた時の経験と顔とで剃刀問屋から品物の委託をしてもらうと瞬く間に剃刀屋の新店が出来上った。安全剃刀の替刃、耳かき、頭かき、鼻毛抜き、爪切りなどの小物からレザー、ジャッキ、西洋剃刀など商売柄、錢湯帰りの客を当て込むのが第一と店も錢湯の真向いに借りるだけの心くばりも柳吉はしたので、蝶子はしきりに感心し、開店の前日朋輩のヤトナ達が祝いの柱時計をもつてやって来ると、「おいでやす」声の張りも違った。そして「主人がこまめにやってくれまっさかいな」と言い、これは柳吉のことを褒めたつもりだった。禪がけこそ